

キプロス

岩井 純

I. はじめに

事実上北キプロスと南キプロスに分かれているキプロス共和国を訪れたのは2005年12月下旬のことであった。関西国際空港からドバイを経由し、南キプロスの空の玄関口ラルナカへ到着。関西国際空港からドバイまでの所要時間約11時間（日本との時差マイナス5時間）、ドバイからラルナカまで所要時間約3時間40分（時差マイナス2時間）である。以下、見聞したことを報告するにあたって「アフロディテの島へようこそ」とむかえてくれたガイドのポピー、通訳をしてくれた土屋の両氏に負うところが大きい。

II. キプロス概観

キプロスの面積は9251 km²（四国の約半分の面積で、東西の長さが240 km・南北96 km）、地中海で3番目に大きい島である。ちなみに最大はシチリア、2番目に大きいのがサルデーニャである。人口は約76万人で、80%がギリシャ系・11%がトルコ系・他にアルメニア人・イギリス人・マロナイト等である。民族を表示する場合はその帰属意識が重要で、通常は使用する言語が基準となる。帰属意識を重視するのであれば宗教を基準としても間違いではなかろう。マロナイトとは宗教を考慮した表現であり、キリスト教マロン派の人々のことである。マロン派はシリア・レバノン・キプロス等に分布している。キプロスにキリスト教が伝来したのは45年のことで、聖パウロによると言われている。公用語はギリシャ語とトルコ語であるが、多くの人が英語を使いこなす。

この国では前8000年の新石器時代の遺跡が発見されている。前3000年には銅が発見されたという。銅を英語ではコパー、ラテン語ではクプロンといい、キプロスという名は銅に由来するという説もある。前2500年頃から青銅器時代となり、前1400年頃ギリシャ人がやってきた。ギリシャ語が伝来し、ギリシャ文化の影響は今も大きい。前7世紀にはアッシリアの時代となり、前6世紀にはエジプトの時代となる。前5世紀頃にはペルシアに占領される。この国の人々は各時代の統治者に税を納めざるを得なかった。前4世紀にはマケドニアから来たアレキサンダー大王の支配下に置かれた。かれの死後支配領域は部下によって分けられ、キプロスはプトレマイオスによって治められる。前1世紀～後4世紀はローマの時代であり、聖パウロやバルバナスによってキリスト教が伝えられた。4世紀～12世紀はビザンチンの時代で、多くの聖堂が建てられフレスコ画が描かれた。7世紀にはアラブの侵攻があり、11世紀にはセルジューク・トルコに圧迫されたビザンチン帝国の皇帝がローマ教皇に救援を頼み、十字軍の遠征が始まる。第3回十字軍に参加したりチャード獅子心王はキプロスを征服し、キプロスは彼の支配下に置かれた。しかし、キプロスの支配を維持するのは大変であったので、リチャードはこの島をテンプル騎士団に売却した。テンプル騎士団は島民をカトリック

に改宗させようとしたり、高い税金をかけたりしたので反乱が起きる。騎士団に懇願されたりチャードはキプロスを買戻すが、**1192年**、この島をエルサレムの王座を追われたギイ・ド・リュージニヤン⁽¹⁾に与える。リュージニヤン朝の始まりである。時代が下って、ベネチアのカテリーナ・コルネーロ⁽²⁾と結婚したジャック王は結婚の翌年**33歳**の若さで世を去り、即位した王の忘れ形見の乳飲み子も死んでしまう。政略の具であることを知ったカテリーナは女王として**15年間**キプロスに君臨したが、ついにベネチアの圧力に屈し、**1489年**、ベネチアに統治権を移譲する。**1453年**、コンスタンティノープルを陥落させビザンチン帝国を滅ぼしたオスマン・トルコは広い地域に力を及ぼし、キプロスは**1571年**オスマン・トルコの支配下に入る。**300年間**オスマン帝国の領土であったキプロスがイギリス⁽³⁾の統治下に入ったのは**1878年**（露土戦争後のベルリン会議による）のことで、さらにイギリスは**1925年**にはキプロスを直轄植民地にしてしまった。この国がキプロス共和国として独立したのは**1960年**のことである。現在、北キプロス（「北キプロス・トルコ共和国」）と南キプロスとに分かれている。**1974年**にギリシャ軍部指導によるクーデターがあり、それを口実にトルコ軍が侵攻した。全体の**37%**がトルコ側となっている。**1975年**、北側に住んでいたギリシャ系住民と南側に住んでいたトルコ系住民の住民交換⁽⁴⁾が国連監視の下に行われた。**1974年**から**20万**のギリシャ系住民が難民として南側に来て、テント生活していたという。南側に住んでいた多くのトルコ系住民も北側に行ったのである。ガイドによれば、トルコ人は**12~14歳**の子どもをレイプしたり、殺したり、残虐なことをしたという。それはギリシャ系住民がトルコ系住民に対しても同様のことを行ったであろうことを想像させる。キプロス共和国（南キプロス）は島全体が自分たちの国であるとの意識のもとに、国土面積や人口は島全体を含めて表現する。初代大統領はマカリオスで、かれは**1977年**に死亡した。墓は標高**1300m**の高さのところに造られている。

キプロスは**6地区**（キレニア・ファマグスタ・ラルナカ・リマソール・パフォス・ニコシア）に分けられる。キレニア・ファマグスタのほとんど及びニコシアの半分は北側である。ニコシアには南北に分断するグリーンライン（国連が管理する緩衝地帯）が設置されている。グリーンは「望みの色」だというのが・・・。キプロス共和国ではトルコの地域・ギリシャの地域という表現はしない。「トルコの地域」を認めることになるからである。南をフリー・パート（自由地域）、北をオキュパイド・パート（占領地域）と呼んでいる。キプロスが分断状態にあるのは、イギリスが侵入してきて自分たちの統治を容易にするためギリシャ系住民とトルコ系住民の対立を煽ったことが遠因となっている。キプロスは地政学的には石油を産出する国々やスエズ運河を管理しやすい位置にある。今もイギリスの軍事基地（全面積の**3%**）が**2ヶ所**にある。**2ヶ所**とも南側で、北側にはない。南側からのイギリス軍撤退要求がなされた場合、トルコに交渉することで北側に基地を置くことも可能であり、南北に分断している現状がイギリスにとっては都合がよいと言えよう。この国ではギリシャ正教が優勢である。プロテスタントも存在する。トルコ人の場合はイスラームが多い。

キプロスには大きく分けると**2つの山脈**がある。北側にあるペンダダクティロス山脈（ケリニア山脈ともいう）と南側にあるトロードス山脈である。最高はトロードス山脈のオリンポス山（**1951m**）である。両山脈の間の平地がメサオリアである。地震はあるけれどマグニチュード**5**程度で、激しい地震はないという。基本的に大きな地震はない。**1950年代**にあった地震で、潰れそうになった村はあるけれど、潰れないで残っている。温泉はあり、湯が湧き出しているが、日本の「温泉」のような使い方はしていないらしい。この国は地中海性気候で、

冬は温暖（山間部では雪が降る）であり、湿気がある。寒いのは1~2月であるが気温11~18度ほどで、冬でも22~25度になることがある。太陽を求めてヨーロッパ北部から観光客が来る。海水温は17度を下ろすことはないが、山岳部ではスキーをすることもできる。地域による気候の違いがあり、移動することによって1日で四季を感じることもできる国である。7~8月は暑く、34~37度になることがある。1年の内340日は晴れているという。1日中晴れているという日ばかりではないが、少し雨が降っても晴れ上がるのである。1日中雨が降り続くことは珍しい。貯水タンクが民家の屋根の上にある。このタンクは雨水ではなく、普通の水道を貯めている。キプロスの水道水の水質は悪くない。2時間の日照があれば湯になるという。太陽発電も行っており、太陽エネルギーをうまく利用している。ユーカリの木はイギリスの統治下でマラリアを予防するためにオーストラリアから導入された。ユーカリは水分を吸収することによって早く生長する。湿地を乾燥させるのに都合がよい。マラリアはイタリア語が語源になっており、悪い空気という意味がある。

この国は農業国であり、大きなキャベツを見かけた。レモンやオレンジもとれる。レモンは1年中収穫できるが、オレンジは冬季及びその前後（10~5月）が収穫の時期である。柑橘類は基本的に10月~6、7月までが収穫の時期と考えてよいだろう。ビニールハウスでは花や野菜を作っている。オリーブやキャロブ（黒い木）がある。キャロブからはシロップを造る。かつてはおやつとして子どもがキャロブの実をかじったという。ブドウは島の南部や西部で栽培されており、しかも標高1500mまで栽培されている。地域差があるので、この国ではブドウの収穫は6~12月まで可能である。ブドウ畑では75種のブドウが栽培されている。果樹は今落葉しているが、リンゴ・アンズ・桃・サクランボ・イチジク・ザクロの収穫ができ、イチゴの収穫も多い。メロンやスイカも栽培される。アーモンド、ヘーゼルナッツなどナッツ類も多い。栗、ピスタチオもある。近年は新しく熱帯性の果物、バナナ・アボガド・パイナップル・グアバ・マンゴーなどが導入されている。マンゴーは輸入していたが、それは青い状態で収穫したものであった。こちらで熟したのものと食べ比べてみるとこちらの方がおいしいという。メサオリアでは大麦などの麦類が栽培されている。たくさんの野菜を輸出しているけれども、麦は輸入している。野菜の輸出先はイギリスやドイツである。かつては就労人口の60%が農業に従事していたが、近年は20%になり、農業国ではあるが最近では農業人口が少なくなっている。キプロス共和国は2004年5月1日EUに加盟した。EUに加盟する前、農業はキプロスの重要な産業であったが、加盟後農業は圧迫を受けている。スペインの大規模農業は機械化することで安価に農産物を生産することができる。キプロスの農業は他国の安い農産物と競争しなければならない。農業に限定すれば、キプロスがEUに加盟したことはデメリットとして表れている。外国人が農業労働者として安い賃金で働きに来ている現実もある。

1950年頃までは移民としてキプロスからイギリスやオーストラリアに行き働く人が多かったけれども、キプロス経済が好転した現在、この国に土地を購入して帰国する人が多いという。ドバイで乗り継いだエミレーツ航空機にはラルナカ空港で降りるフィリピン女性が多数乗っていた。彼女たちはキプロスのさまざまなところで働いている。化粧のきつい女性の場合にはナイトクラブやバーで働いているのかも知れない。フィリピン女性はかなり前からキプロスに働きに来ているらしい。ホテルでボーイとして働いている人はポーランドなど東欧出身者が多い。イギリスの植民地であったことから、この国を訪れる観光客の60%以上はイギリス人である。ドイツ・オーストリア・スイス・スカンディナヴィア諸国からの観光客も多い。ヨーロッ

パに比べて安いためにキプロスにアパートを購入する人や、購入しないまでも6ヶ月ほどの長期に渡ってこの国に滞在するヨーロッパ人は多い。観光客に限定しない場合、キプロスに来るロシア人は増えているが、日本人は少ない。気候が良く、物価が安く、ホスピタリティーの面も良好であるとの理由で観光客の33~34%はリピーターだという。

この国では女性の38%が働いていると言われる。共働きの家庭が増えている。子どもの数は平均2人まで達しない。育休は4ヶ月なので、子どもの世話をしてくれる人がいないと女性は働くことができない。保育所は公立も私立もある。保育料は高く、月に50~80ポンド(1万2000~1万9200円)かかる。キプロスの通貨単位はキプロス・ポンドで、1ポンド(1ポンド=100セント)が約240円ほどである。ちなみに、日本までのはがき料金が31セント、封書料金は36セントである。5歳で幼稚園に入り、6歳で小学校に入る。10年間の義務教育は無料である。小学校4年から英語を学ぶ。中学校になると英語を除いた第2外国語の勉強をする。第2外国語はフランス語・スペイン語・ドイツ語・ロシア語の中から選択する。ギムナジウム(高校)に進学すると、大学で学ぶ専門領域を決める。それから大学へ進学する。大学への進学率はカナダ・アメリカ・日本に次いで高いという。この国には徴兵制があり、17~18歳になると26ヶ月の兵役に行かねばならない。キプロスの大学に進学すれば大学卒業後に兵役に行けばよい。外国の大学に進学する場合は、兵役を終えてから進学することになる。女性の結婚年齢は23~24歳、男性は26~27歳が多い。定年退職は女性63歳、男性65歳。平均寿命は女性79歳、男性74歳だという。平均月収は500~600ポンドというから15万円弱である。

キプロスのビールにはKEO(ケオ)とカールスベルグがある。カールスベルグは元々オランダのもので、キプロスの工場で作っているのだ。ビール以外の酒はブドウから作っている。52種のワインが造られ、中でもコマングリアは中世13~14世紀から造られている甘いワインで有名である。キプロスのワインは有名であるが、日本にはあまり入っていない。ワインはニコシアのスーパーで安く売っているし、修道院で売っているワインも高くはない。免税枠を越えて日本にワインを持ち込むと1本あたり150円の税金がかかる。アルコールの度数が高くなると税金も高くなる。

森で覆われていたキプロスは、前3000年銅が発見され銅を取るため多くの木が伐採されていった。前3世紀にはキプロスの木がエジプトの船に使われた。4世紀には17年間もの間雨が降らないことがあって、森林が失われたという。今は国土の19%が森林であり、松や杉がある。街路樹として植えているオレンジはビター・オレンジかも知れない。ビター・オレンジの実は苦くて誰も取らないので、街路樹に使われることが多い。

クリスマスの頃は買い物のシーズンで、子どもはおもちゃを買ってもらったり新しい洋服を買ってもらったりする。七面鳥を食べ、イブは家族や友人と過ごす。24日は就労する。夜だけがイブなのである。25日はクリスマス、26日はボクシングデーで休日である。元々は教会が貧しい人たちのために募った寄付を入れた箱を開ける日がクリスマスの翌日であったことからこの日をBOXING・DAYと呼ぶとか、クリスマスであっても主人に仕えなければならなかった召使い達にクリスマスの翌日を家族と過ごさせるための日とし、主人が召使いに箱(BOX)にプレゼントを入れて配ったのだと言われている。クリスマスの日は朝、ギリシャ正教会の教会でリトルギー(カトリックではミサという)が行われる。学校は12月21日~1月7日まで休業である。

Ⅲ. トロードス山岳地区

トロードス山岳地区はキプロスの3分の2を占める広いエリアである。ハイウェイがトロードス山脈を通っている。高速道路が開通するのには時間がかかったようだが、高速道路の通行料は無料であり、ニコシアとパフォスの間がつながっている。トロードス山脈には松の木が多い。山が白くなっているところは雪であり、太陽が出ると暖かいが隠れると山間は寒くなる。乾燥しているので山火事が起こりやすく、植生を失った山がある。タバコの火の不始末やメタルの加熱で火事が起きるのだ。イギリス軍のレーダーがある。イギリス軍のレーダーもキプロス軍のレーダーも、両方とも意識しているのはトルコであろう。トロードス山岳地区には文化遺産に指定されていないが、古い小さい教会がたくさんある。

アシヌー教会（パナギア・ティス・アシヌー教会）はユネスコの文化遺産に指定されたトロードス地方の聖堂群（10）の1つである。この教会にもビザンティン時代のフレスコ画が残っている。フラッシュでフレスコ画を傷める恐れがあるので教会内の写真撮影は禁じられている。イエスが手をさしのべている絵はこの教会を祝福しているのである。ホーリー・マザー（聖母マリア）の両側に天使のいる絵、アダムとエバ（イブ）それにダビデやソロモンを復活させている絵、有名な「聖母マリアの眠り」のフレスコ画もある。「セバステの40人の殉教者」という図は40人の殉教者が冷たい湖に入れられ凍死した場面である。聖パウロや聖ピエトロの絵もある。この教会は14世紀に増築した。建築当初のオリジナルのフレスコ画を14世紀に塗り直したことが、二重になっているところからわかる。建築当初のオリジナルのドアがある。そこが当時のこの教会の入り口であった。この教会はフォルディオティサ教会とも呼ばれる。羊飼い・羊を守護するという意味をもつ。フォルディオは動物のことで、動物の絵がある。14世紀の画には、聖ピエトロが天国のドアを開ける鍵を持っている図や白馬にまたがった聖ジョージの図がある。建築当初のフレスコ画は洗浄してきれいにしたことはあるが、基本的にオリジナルである。14世紀のものもオリジナルである。ギリシャのペレポネソス半島にあるアシニに住んでいた人々がここに移住し形成した村であるから、アシヌーと称する。アシヌー教会は聖母マリアに捧げられた教会で、12世紀初頭ニキフォロスが建てた。ビザンティン時代（4～12世紀）にはキプロスに多くの修道院や教会が建てられたのである。フォルディオティサ教会はニキタリ村から約5km、アシヌー村にある。フォルディオティサというレストランがある。フォルディオティサにおける昼食はアフエリアであった。アフエリアはキプロスの典型的な料理で、ポークを赤ワインとオリーブオイルに1晩つけ込んで煮込んだものである。プロールというトマトチャーハンのようなものを一緒に食べる。

アシヌー教会からガラタ村のパナギア・トゥ・ポディトゥ教会（足の聖母の教会）までは車で20分ほどの距離である。教会は通常閉鎖されていて、教会の鍵番に開けてもらわないと内部を見ることができない。鍵番が教会から離れたところに住んでいる場合は車でピックアップしていくことになる。民家にしか見えないパナギア・トゥ・ポディトゥ教会は標高700～800mのところの位置している。この教会は16世紀の初め、1502年ベネチア支配時代に富裕な人の寄付によって造られた。フレスコ画を守るために二重の壁になっている。フレスコ画のすべてが完成しているのではないのは、資金がなくなったためであろうか。絵の中には、この教会を建てた家族が教会を支えている構図のものがある。イコノスタシス（聖画壁）で隔てられ

た奥の聖域にある絵はルネサンスの影響がみられる。大天使ガブリエルによる受胎告知や入口上部の磔刑図はベネチアの影響を受けている。この教会は、現在、カトリックでいうところのミサを行うことはなく、照明もキャンドルの明かりだけである。東方正教会ではカトリックのミサにあたるものをリトルギー（聖体礼儀）と表現する。

ソゾメノス教会（ソティロス・ソゾメノス）もガラタ村にあり、ユネスコの文化遺産に指定されている。古いガイドブックには文化遺産に指定されているトロードスの教会の数を9と記載しているが、今は10の教会が指定されている。ソゾメノス教会が最後に、10番目に指定されたのである。ここは電気による照明がなされ、16世紀に描かれたフレスコ画がある。フレスコ画ではイエスの生涯とマリアの生涯を描いてある。聖母マリアのストーリーではマリアの母アンナが受胎告知を受けている。マリアの父はヨアキムである。イエスのストーリーではイエスがヨルダン川で洗礼を受ける場面、ラザロを復活させる場面がある。イエスが逮捕されるようす、裁判にかけられ磔刑になるまでのステップが描かれている。聖ジョージのドラゴン退治の図があり、イコノスタシスの左側には「聖母マリアの眠り」がある。眠りと表現し、死とは言わない。聖ヘレナや聖コンスタンチヌスの絵もある。ヘレナはコンスタンチヌスの母で、キリストがかけられた十字架を持ち帰ったとされている。ガラタ村にある新しい教会（ホーリーマザー・チャーチ）ではミサ（ここではリトルギーというべきである）が行われていた。新しいとはいっても100年ほどの歴史があるという。

ガラタ村から車で5分ほどのところにカコペトリア村がある。キプロスには小さな川しかない。その小さな川の1つがカコペトリア村を流れている。この小さな村には2つの大岩がある。何百年か前にあったことだとして、結婚式の後新郎が落ちてきたこの岩に押し潰されたという話が伝わっている。ここは山の中のリゾート地で、岩の上方が新しい村になっている。レストランが並んでおり、絵はがきなども売るキオスクのような店がある。標高750~850mの高さにあるこの村には胸を患っている人が療養に来ることもある。

プラトレス村にはホテルやレストランがあり、北欧・オーストリア・スイス等から来た人が滞在する。標高1000mのところ、2km及び9kmの散策コースが設定されている。プラトレス村は、1950年代エジプトのファルークがよく来たところだという。ファルークはイスラーム教徒だが、キプロスのコニャックを愛した。人前で飲むことはできなかったので、コニャックにオレンジを入れてオレンジジュースを飲んでいるように見せかけたのである。1952年、ナセル大佐の率いるエジプト軍が政権を奪取した結果、近代エジプト王国の国王であったファルーク⁽⁵⁾は退位を余儀なくされイタリアに亡命した。ただちにファルークの息子の国王即位が宣言されたが、結局エジプトは共和国宣言を行い、これによって1805年にムハンマド・アリーが権力を握って以来エジプトに君臨してきたアリー王朝は幕を閉じた。1965年、ファルークは亡命地ローマで心臓発作のため死亡し、遺体はエジプトに戻されて埋葬された。

標高1700m地点の休憩所にはカフェや商店があるが、集落があるのではない。村（集落）で最も高い所にあるのは標高1500mのプロドロモス村である。休憩所の周囲には雪が残っていて滑りやすかった。商店で試飲したコマンドリア・ワインは甘くて食中酒としては飲めない。食前・食後酒である。マテラ酒のように発酵を抑えたアルコール強化ワインではない。ワイン⁽⁶⁾はアルコール添加の有無によって非強化酒と強化酒に分類することができる。非強化酒は発酵によって生じたアルコール分のみを含有するワインであり、強化酒はブランデーやアルコールを加えたもので、たんにアルコール分の増加を目的とするものと適当な時期にアルコ

ールを加えて糖分を残すものがある。ここではキャロブ・シロップも売っていた。この国では熟する前にとったフルーツをシロップに漬け、ビン詰めにする。リンゴのようなフルーツだけではなくナスを用いることもある。友人が来たとき甘いものをだす習慣があるのだ。近辺には小さなホテルやスキー・クラブがあり、雪と共にクリスマスを過ごすことができる。イブを楽しんで朝4時頃眠りについたため午前中は寝て、午後になってから雪と過ごす人も来る。駐車場にはUN（国連）と表示した車があり、向こうの山頂には白い玉のように見えるキプロス軍のレーダーがある。松の木が雪化粧をして美しい。ニグラ松、黒という意味の松である。ゲレンデがあるが、スキー場は1月になってからオープンする。雪が少ない年は3月になってからオープンすることもある。12月の今は、雪が少ないのでまだオープンしていない。少し下に降りると、もう雪はない。このあたりはハート・オブ・サイプレス（キプロスの心臓）と呼ばれる。キプロスは海底が隆起した島であり、9000万年前海中に最初にキプロスの核になるようなものができ、4000万年前に2つの山脈の部分が海面に表れたという。1000万年前に2つの山脈は陸続きとなり、250万年前に今のキプロス島の形になったと言われている。近くの峰の上にある白い大きなボールはイギリスのレーダーである。イギリスのレーダーのあるところがオリンポス山であり、スキー場がある。標高1700m地点の休憩所付近はイギリス軍の基地のあったところである。オリンポス山にイギリス軍のレーダーがあるが、そこに基地があるのではない。

マカリオスの墓では私語は禁止、うるさくしてはいけない。かれはキプロスの父とも言うべき存在で、尊敬されている。マカリオスは1913年8月13日に生まれて、1977年8月3日に亡くなった。この国の初代大統領である。マカリオスはミハイルという名であった。パフォスのカガヤ村の貧しい羊飼いの家に生まれ、6~12歳まで小学校に通った後、キコス修道院⁽⁷⁾において修道士見習いのような存在で勉強した。修道院で畑仕事や掃除をし、修道士からギリシャ語や歴史を学んだのである。なお、東方正教会では修練士と表現される存在はない。奨学金を得てニコシアのギムナジウムで学び、やはり奨学金を得てアテネ大学⁽⁸⁾神学部を卒業した。また、奨学金を得てボストン大学にて宗教や社会学を学んでいる。マカリオスは1946年にキティオン（ラルナカの古名）の主教になり、1950年にはキプロスの大主教になった。1955年、イギリスの支配下でマカリオスは独立運動に入る。右翼組織エオカ（キプロス抗戦国民組織）はエノシス（キプロスとギリシャの併合）を主張しており、マカリオスもエノシスを支持したのである。エノシスの過激派がエオカと協力して1955年から反英テロ活動を開始したため、イギリスによってエノシス運動は違法として弾圧され、1956年マカリオスは一時インド洋にあるセイシェルに追放⁽⁹⁾される。追放されて1年後、追放を解かれてマカリオスはアテネに帰ってくる。この頃からマカリオスはエオカの活動によって生まれる混乱を考え、ギリシャとの併合路線を放棄して、ギリシャ系・トルコ系両住民を統合した統一キプロスの独立を求め方針に転じた⁽¹⁰⁾。1959年、ギリシャ系キプロス人代表のマカリオス、トルコ系キプロス人代表ファズル・キュチュックそれにイギリス・ギリシャ・トルコそれぞれの首相がキプロスの独立を承認するロンドン条約⁽¹¹⁾に調印した。この条約は有事の際（ギリシャへの併合またはキプロスの分割を目的とする行動があった場合）には、イギリス・ギリシャ・トルコそれぞれの国に介入する権利を認め、イギリスが島内に2つの軍事基地を所有することも認めていた。キプロスは1960年独立し、マカリオスは大統領になった。かれは大主教であったから、宗教的なことも含め尊敬されていた。しかし、1974年にはマカリオスに対するクーデターが

起こり、それを契機としてトルコが侵攻してきたのである。1977年、5月に最初の心臓発作があり、8月3日の心臓発作でマカリオスは死んだ。ニコシアではなく、山奥のこの地に葬られたのはマカリオスの希望による。かれは占領地にあるペンダダクティロス山脈の見える地、キプロスの行く末を見ることができる地を選んだのである。マカリオスの墓にはめ込まれているプレートには、「シプリオス（キプロスの人たち）、どこに私がいようとも、あなたとともにいつもいる」と表示してある。墓にはキプロス共和国の国旗とギリシャの国旗が立っている。高台にはマカリオスの死後造られた小さな礼拝堂がある。周囲にある木の枝にハンカチが結ばれているのは、そうすると願い事がかなうと言われるようになったからである。礼拝堂の一面にローソクが立てられている。ローソクを立てるのは外国人で、キプロス人は立てない。ローソクを立てる場所ではないのでやめさせたいという思いがキプロス人の側にある。この礼拝堂にはキコス修道院にある聖ルカの描いたとされるイコン（聖画像）のコピーがある。

キコス修道院はマカリオスの墓から3 kmほど離れたところであって、15~17人の修道士がいる。ここは、11世紀にビザンティン帝国皇帝アレクシオス・コムニノスによって建てられた。ルカによって描かれたと言われる聖母マリアのイコンがここにあることになっている。アレクシオス・コムニノスの娘が病気になったとき、コンスタンティノーブルにあったルカによる聖母マリアのイコンをキプロスに奉納すると病気が治るとのことでイコンを奉納した。それだけではなく修道院をも造ったのである。11世紀に建てられたこの修道院は4回火災に遭ったという。最後にあった火災は1817年で、今ある修道院の形はその前の形だという。修道院内の礼拝堂に、ルカによって描かれたと言われる聖母マリアのイコンがある。しかし、カバーがかけられていて見ることができない。特別に公開することもしない。18世紀にこの地を病魔が襲ったとき、イコンは今よりも高い位置にあったという。火災のときにもこのイコンだけは守るという姿勢が見られる。17世紀に描かれたフレスコ画が天井の凹みに残っているが、フレスコ画やモザイクは基本的に1979年以降に作成されたものである。アレクシオス・コムニノスがイコンを奉納するためそれを持って船から降りたところを描いたフレスコ画、ルカがマリアに彼女の絵を描く許可を乞うている場面やマリアが手をあげて祝福している場面のモザイクがある。モザイクの中には「聖母の眠り」がある。キリストの手にある赤ん坊はマリアの魂を意味している。イコノスタシスは銀箔で覆われている。キコス修道院にはたくさんのきらびやかなモザイクがある。通常は売店でワインを売っているのだが、この日売店は閉まっていた。

ペドラス村に行く途中、遠くに白いボールを見かけた。キプロスの気象観測用のレーダーである。ペドラス村の入口にあたる山の上には白い十字架（ホーリークロス・ペドラス）がある。寄付によって建てられた「聖なる十字架」を横に見ながらペドラス村に入ると「ツー・フラワーズ・ホテル」レストランがある。ここは地元の人にも観光客にも人気があって、いつも混み合っている。クリスマスであるから混み合っているのではない。昼食をとった「ツー・フラワーズ・ホテル」レストランではパレスチナ・ポテトというサトイモ（ヤツガシラ）のようなものがでた。セットメニューの「メッセ」は、多種のプレートによるキプロス料理である。このレストランのそばにはマカリオスの像が建っている。ペドラス村は標高1100 m。チェリー（サクランボ）の産地として有名で、チェリー祭りのときには無料で配られる。スイカで有名な村もあり、そこではスイカ祭りが行われる。

ペドラス村からオモドス村まで車で45分ほど。途中にバーベキューのできるピクニック・

エリアがある。バーベキューをスプラキといい、夏、ピクニックで好んで行われる。こちらの人は野外で食べることを好むのである。危険な野生動物はいない。野生動物では山ヤギがいる程度である。山ヤギは捕らえてはいけない保護動物となっている。山岳部では冬キノコ狩りができるという。雨が降った後にはエスカルゴ（かたつむり）を捕らえて食べる。トロディサス修道院がある。ここは観光客にはオープンしていないので訪れることができない。

オモドス村周辺にはたくさんのブドウ畑がある。自宅でワインを造っているところが多い。オモドス村はロードス南部に位置するクラソコリア（ワイン村）の1つである。この村には古い建物が数多く残っており、聖十字架教会の歴史は特に古く、4世紀にまで遡ることができるという。現在の教会は18世紀に建てたものである。墓地にある墓に造花を使用しているのは、墓地を美しいままにしておこうとの配慮である。クリスマスゆえに家族が集まって食事をしているためであろうか、村は静まりかえって村の中心である広場には誰もいない。広場に面してカフェテリアがあり、聖十字架教会がある。この教会は、4世紀聖ヘレナによって建てられ、その後破壊され、18世紀に再建された。元は修道院であったというが、今は修道院としては使われていない。ここにはイエスを縛っていたロープの一部や聖フィリッポの頭蓋骨を納めてあるという。頭蓋骨は聖遺物を入れる棚に置かれており、イエスが縛られていたロープは聖域（イコノスタシスの奥）にある。鐘が鳴ったのはこれからリトルギー（ミサ）が始まるという合図で、教会の中ではリトルギー（ミサ）の準備をしている。大きなパンは亡くなった人のために信徒が納めたものである。教会近くにある土産物屋は1軒を除いて閉まっており、ハーブ・ショップも閉まっていた。開いていた1軒の土産物屋ではキャラブシロップやシュシュコを売っていた。シュシュコ⁽¹²⁾は茶色のデコボコした棒状の菓子で、材料はアーモンドとブドウジュースである。アーモンドを風糸のようなものでつなぎ、それを芯にして小麦粉を混ぜたブドウジュースに何度も漬けて作成する。昔ながらの細い路地にはノッカー付の古いドアのある石造りの家が並んでいる。古いスタイルの家が残っている一画にはブドウ搾り機の保管庫がある。各家庭にブドウを搾る機械があるわけではないので、ここで搾った液を家に持って帰るのである。路地にはタベルナ（ギリシャ語でレストラン）があり、ホテル、というよりは部屋を借りて滞在するところがある。

白い岩肌は石灰岩である。キプロスは隆起した島なので、ほとんどが石灰岩の地である。石灰岩の地はブドウ栽培に適しているのだ。石垣で土地の境界を明確にし、所有者の存在を示している。キャラブ（イナゴ豆）の葉は丸い。キャラブの実からとれる甘いシロップは輸出しており、生産者にとって現金収入となる。キャラブの実はラクサキムという薬として、便秘薬・消化剤としても使われてきた。また、化粧品にも用いられてきた。キャラブの種をキャラットといい、実の中の種は同じ大きさ・同じ重さであるという。このことからダイヤの重さの表示に使われるカラットはキャラットに由来すると言われている。キプロスのロバは足腰が強く、物を運ぶのに使われてきた。今は車が運搬手段となっているのでロバが重要視されることはないが、保持するためにロバが飼育されている。

IV. ニコシア

ニコシアの古称はレフコシアで、人口20万、この国最大の都市である。キプロスの首都であり、政治の中心である。グリーン・ラインが北ニコシアと南ニコシアに分けており、世界の

首都の中で唯一分断された都市となっている。15世紀に造られた聖ソフィア大聖堂はオスマン・トルコの征服後モスクに換えられた。グリーン・ラインの幅は広くはない。この町には初代大統領の名を取ったマカリオス通りがあり、町の中心には車両通行禁止区域もある。宿泊したホリデイ・インはグリーン・ラインに近いニコシアの中心部にある。ホリデイ・インにはボンザイという日本食レストランがある。ニコシアの市壁は、16世紀ベネチアの時代に造られた。市壁の長さ約5 km、11の砦があり3つの門があった。約5 kmの市壁は大部分残っている。それぞれの門には、その門が向かう方向の地名が名称としてつけられている。北にあるのがカリニア門、西がパフォス門、東がファマグスタ門である。町を守るために、夜になると門は閉じられた。濠があったけれども、空濠であった。地方から来た人は空濠の中にテントを張って、門が開くのを待ったという。市壁の中が旧市街であり、外が新市街である。「エルメス」はキプロスのショッピング・センターで、新市街にもあるが旧市街にある方が大きい。中心部にあるリバルディー広場はイルミネーションがきれいである。リドラス通りはショッピング街で、車両は通行禁止となっている。劇場の近辺にはカフェテリアが並んでいる。ファマグスタ門の上部にオスマン・トルコのマークがあるが、門は16世紀のベネチア時代のものである。ファマグスタ門の中は3室に分かれており、現在はカルチャーセンターとして使われている。3つの門の中ではファマグスタ門の保存状態が最も良い。ファマグスタ門からあまり離れていないところに水道橋や自由の記念碑がある。水道橋は16世紀、ベネチア時代に造られたものである。

自由の記念碑は1960年のイギリスからの独立を記念したもので、上部には自由の女神、下部には兵士が牢獄の門の鎖を開けて人々を解放している群像が表現されている。ギリシャでつくられたこの碑は1974年に設置された。しかし、皮肉なことに1974年にギリシャ軍部指導によるクーデター、それを契機とするトルコ軍のキプロス侵攻で内戦が始まったのである。「牢獄」の内部の穴や群像にある小さな穴は内戦時の弾の跡である。道路にはウォーキング・ツアーの標識がある。自由の記念碑～図書館～大主教館～聖ヨハネ教会～ビザンティン美術館～ハジゲオルガキス・コルネシオスの家等を巡るコースの表示がなされており、1時間半ほどまわることができる。

V. おわりに

ギリシャ語で、パメは行きましょう、ヤマスは乾杯、カリメーラはおはようございます、ヤサスはこんにちは、エフハリストはありがとう、である。この国をギリシャ語ではキプロスといい、英語ではサイプロスという。南キプロスの人もパスポートを見せればグリーンラインの向こう側に行くことはできる。しかし、それでは外国に行くような感じがして、行きたくないとガイドは言うのである。

注

- (1) 澁澤幸子、キプロス島歴史散歩、新潮社、2005、P.50
- (2) 前掲(1) P.59
- (3) 前掲(1) P.18
- (4) 前掲(1) P.86
- (5) 編集代表桑原武夫、世界伝記大事典 世界編 10、ほるぷ出版、1984、P.270～271

- (6) 河野友美編、酒 改訂食品事典⑨、真珠書院、1985、P.131
- (7) 篠田節子・鴨志田孝一、交錯する文明－東地中海の真珠キプロス、中央公論新社、2000、P.44
- (8) 大島直政、複合民族国家キプロスの悲劇、新潮社、1986、P.43
- (9) 前掲(1) P.78
- (10) 前掲(5) P.303
- (11) 前掲(1) P.79
- (12) 地球の歩き方 ギリシアとエーゲ海の島々&キプロス 2004～2005年版、ダイヤモンド社、2004、P.342